

音源の比較試聴(21)

ーリムスキー＝コルサコフのシェラザードー

1. 始めに

前報(20)に引き続き、各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の再構成はアースアキュライザーの活用(6)で述べたとおりで、さらに対策を追加しています。今回もそれらの対策の効果をも、音源を替えて総合的に確認していきます。

音源は、下記の音源のニコライ・リムスキー＝コルサコフのシェラザードの曲を聴いていきます。

アナログ盤

PHILIPS 25PC-74

キリル・コンドラシン指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

CD

DECCA UCCD-4418

キリル・コンドラシン指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

Victor VICC-75007

ウラディミール・フェドセーエフ指揮モスクワラヂオシンフォニーオーケストラ

DECCA UCCD-7022

レオポルド・ストコフスキー指揮ロンドン交響楽団

STAGE+

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

ジャンアンドレア・ノセダ指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団

ベルリンフィルデジタルコンサートホール

グスターボ・ヒメノ指揮ベルリンフィル

ズビン・メータ指揮ベルリンフィル

ネーメ・ヤルヴィ指揮ベルリンフィル

トゥガン・ソヒエフ指揮ベルリンフィル

3. 音源の比較試聴の試聴結果

アナログ盤のコンドラシン指揮アムステルダムコンセルトヘボウは、1979年の録音で発売当初、名演奏、優秀録音の評価がなされたものです。現在、聴いてみても、

随所を締めるソロヴァイオリンの艶やかさや歯切れのよいオーケストレーションなど、演奏の良さや録音の優秀さが十分に味わえます。

CDのコンドラシン指揮アムステルダムコンセルトヘボウは、アナログ盤のコンドラシン指揮アムステルダムコンセルトヘボウと録音時期も同じでマスターが同じものと思われます。演奏は勿論のこと、CDになってもアナログマスターの良さは引き継がれています。

CDのフェドセーエフ指揮モスクワラヂオシンフォニーオーケストラは、1981年の録音で、フェドセーエフ指揮でモスクワラヂオシンフォニーオーケストラから名称が変わったチャイコフスキーオーケストラの演奏会で求めてきたものです。ずっと以前のことで記憶は薄れていますが、音量の大きさと迫力に驚いた記憶があります。音質は繊細感が少し後退し、太目で迫力ある演奏です。

CDのストコフスキー指揮ロンドン交響楽団は、1964年の録音で、ワイドレンジではなく、いかにも時代を遡ったアナログマスターという音質ですが、演奏もおおらかで違和感はありません。

STAGE+のカラヤン指揮ベルリンフィルは、収録年は不明ですが、音質もかなり良く、カラヤンらしい耽美的な演奏です。

STAGE+のノセダ指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団は、2023年のラインガウ音楽祭での収録で、収録が新しいだけあって音質もよく、ホールの響きも豊かでライブ感あふれる演奏です。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのヒメノ指揮ベルリンフィルは、2021年収録です。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのメータ指揮ベルリンフィルは、2019年収録です。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのネーメ・ヤルヴィ指揮ベルリンフィルは、2006年のワルトビューネコンサートの野外劇場の収録です。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのソヒエフ指揮ベルリンフィルは、2016年収録です。

以上、4つのベルリンフィルデジタルコンサートホールの演奏は、指揮者の指揮のスタイルやコンサートマスターのソロヴァイオリンの演奏の違いや収録年代や収録場所の違いはありますが、いずれもベルリンフィルらしい緻密でバランスのとれた演奏です。

4. まとめ

いずれをとっても、アースアキュライザーの投入とそれに伴うアースラインの再構成、さらにはAVドーナッツなどの結果、すべて効果がそれなりに現れ、メディアや演奏の違いや収録年代の違いも把握でき、格落ちするような音源のフォーマットや再生経

路はなくなったことが確認できました。

以上